

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | アメリカ國語教育の傾向   |
| Author(s)    | 八木, 毅   |
| Citation     | 語文. 1950, 1, p. 39-48   |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/68365">https://hdl.handle.net/11094/68365</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# アメリカ國語教育の傾向

## 八 木 毅

### はしがき

私は現在日本の教育がその実質はともかくとして、その制度・形式が殆んどアメリカの影響下(註1)に改変されてきた事実にかんがみ、かの國の國語教育が如何なる基盤の上に、如何なる方法で行われているかを知ることによつて何をわれわれは当面緊急の問題としなければならぬかを考えてみなければならぬと思ふのである。

私がここで扱おうとする國語教育は國語(English)の Literatures, Writings, Reading, Spelling, Speaking, Language などを含んでおるものとして考えてゆきたい。資料は二三を除いて、ごく最近のものばかりというわけにゆかなかつたのは残念であるが、大勢の把握を目的とする本稿では許して頂きたい。記述の中心を中等教育におくつもりなのだが、その前後の初等・高等教育にも若干紹介の筆が及ぶ筈である。

### 一 アメリカ國語教育の環境

コトバは元來人間の社会生活に随伴して發生し、發展し、存在するものであるが故に一つの國におけるコトバ、即ち國語に関する教育の環境は必然に時間的・空間的、伝統的・社会的な場において生

きているものとして考えられなければならないと思ふ。そうした見地に立つてアメリカの國語教育の環境を考慮する時次のようなことがいへるであらう。

第一に、アメリカ連邦の成員は人種的に多様であり、この國における教育の特色の一つが、國民を、アメリカナイズ(Americanize)することであり、そこでは國語としての英語が重んぜられているのはいうまでもない。その例

としてハイ・スクールのカリキュラムを見ても下表の如く國語の單元が尊重されているよりだし、また連邦教育局発行の「U.S.A.の教育」(註2)をみても全米四十九市の小学校十七教科目中時間数からいつて國語関係 次の四科目が最も多く、六ヶ年通計すれば、言語(Language)一四一七時、読方(Reading)二〇

| ノース・カロライナ<br>(学科) (単位) | オハイオ<br>(学科) (単位) |
|------------------------|-------------------|
| 國語 4                   | 國語 3              |
| 数学 2                   | 社会学 2             |
| 社会科学 2                 | 社会学 1             |
| 社会科学 2                 |                   |
| 外國語 2                  |                   |
| 語学 4                   |                   |
| 選 16                   |                   |

参照：“Curriculum principles & Social trends” Gwynn, John Minor PP. 337-8 1945

○三時、綴字 (Spelling) 五九八時、英習字 (Penmanship) 五六七時、計四五八五時となり、全教科時数一一九三四時に対して三八パーセントを占めているのである。

第二に、アメリカの社会思想は独立宣言(註3)に淵源すると見られるのであるが、そこにある個人主義は、社会を前提としたものであり、従つて、教育が負わされる個人の人格完成も、そういう意味におけるものであり、社会的な感覚を習得することを彼らはまず要求されるのである。このことは「ジュニア・カレッジにおける英語」(註4)が個人的な單元である創作や、自主的な読書においてさえ、グループ方式を要求しているところにうかがえるし、それはまた、右の主張がさらにいうように、「話し方や、現代文学の当面する問題でもあり、社会的理解の問題」でもある。アメリカ民主主義は個人々々の社会的人間の自覚に出发しなければならぬ。かゝる社会を背景としての國語教育において、文学の重んぜられるのは当然である。ゴツシュ氏の「ジュニア・カレッジにおける英文学」(註5)は五十二のジュニア・カレッジの觀察の結果、英語科教授の諸問題を取り上げ殆んどのジュニア・カレッジでは事実全新入生が文学コースを取つてゐることを示すと共に、そのコースに対する興味、目的、テキスト、方法の設定を通じて如何にしてこのコースをコミュニティ・ニードに適合させるか、という問題が報告されているのである。別な論者(註6)はまた、「言語学科がわれわれの社会生活の要求に十分合致せねばならぬということを知るのは英語教師の責任である。」ともいっている。

第三に、人間の理解に深きを求めるアメリカのヒューマニズムは、個人の市民的人格の全一的完成を前提とする点において、フア

ツシズムの「人民のための社会」とその出発点を異にしている。民主主義的市民は現実を理解し、天才的作家の、すぐれて精妙な感覺や、高邁な思索の後を辿り、時代と社会の絶えざる要求である市民資性の完成を果さねばならないのである。だから、文学教育は民主主義的市民を創り出す手段として考えられている。それ故、卒業後上級に進学せずによく社会生活に入る所謂ターミナル・ステウデンツのために、それがたとい航空学生であつても殆んどのカレッジは文学のコースを開いているのである。(註7)

第四に、地方分権の伝統である。カリキュラムの構成は一応 Bureau of Education (連邦教育局) によつて National Planning がたてられても、各州毎、各自治体毎に、その属する地域社会の要求に應じ、カリキュラムの目的設定委員会や、構成委員会(例えば「現代語研究会 Modern Language Study の如きもの)によつて各グレイドを通じての一貫的カリキュラムが作られる。右の現代語研究会は一九二三年につくられて、現代語カリキュラムの作成に着手したのであつたが、その実行委員は(大学教授十八名、ハイ・スクール教師六名、州教育局一名)廿五名であつた。(註8)、このようにして欧伝來のアカデミック・スクールからコミュニティ・スクールへの転換が漸次行われてきたようである。(註9)それは学校立地の地域的要求を十分しんしゃくしつ、学校の運営をはからねばならないという考えに立つのである。

第五に、最近数十年の教育思潮の新傾向も、右の如き動きの力となり、環境としてはたらいっている。本來の人文主義思想に、現在主義思想が止揚され、プラグマティズムの哲学者と、それを教育思想に反映させた經驗主義教育学者パーカーや、デューイーがでて、経

験の尊重、生活学習の提唱があつてからは、生活現象を第二義的に考ふる英國流のリベラルアーツ・カレッジの存在や学科カリキュラムを、その根柢から動搖させ、教育の根本問題に深刻な反省をなさしめた。その結果、當然、特に低いグレードのカリキュラム構成に社会学習が中心として取上げられた。そこにおいて中心的な位置を占めておるのは、われわれの觀念でする社会科というよりはむしろ、実用化され、生活化された國語科であるといつた方が妥当である。そのことは現代語教育としての English が依然として諸教科の第一位として尊重されているによつても知ることができよう。

即ち、連邦教育局一九一八年の報告書 (Cardinal Principles of Secondary Education) においても中等教育の七ヶ條の目的中、第二條に基礎学科の習得として、「生活上必須の基礎学科を修得せしめ、特に國語に熟達せしめること」を記しているのである。

アメリカにおける國語教育の環境は要するに、民主主義的な、しかも一種の國家主義によつて多彩に色どられているといえよう。そこには極めて積極進取のフロンティア・スピリットの躍動も、プエーリタニカルな敬虔、嚴正への志向も見られるであらう。所謂コア・カリキュラムがフロンティア地方に計画され、試みられたに止まるによつてみても、育つものと環境との相関の面白さがあがるかがあるのではなからうかと思われる。次に学校教育の中核をなす中等教育がこの國においてどのような原理と目標をもっているかを一瞥してみよう。

## 二 中等教育の原理と目標

アメリカの國語教育が如何なる一般的环境の中にあるかは右に述

べたが、かかる環境の現実から、どのような目標が立ち樹てられてきたかを知ることが必要である。つまり國語教育の目標も、そのような一般的な理論的な分析の過程に浮び出てくるものであり、技術的、實際的な綜合・統一の過程において実施されるのである。私はいくつかの分析に教育目標を追求し、次章において國語教育が如何に綜合統一をめざした実学となつていのかをしらべてみたいと思ふ。

### (一) 中等教育の目標と、その基礎

教育における目的分析の鍵は、人々の實際生活における現実と、社会的約束との分析に見出されるべきである。それ故に、教育の一部門としての中等教育の目的は、個人が平常にかゝりあつていゝ現実と、そこにおいての約束との實際面に注意が向けられ、解釈が導かれて設定されるのでなければならぬ。その解釈は固定的なものではないし、またそれはありえないと考へられる。つまり社会が異り、時代が異れば当然、その解釈を結論は変らねばならぬものであり、明らかに対象となる世代が違ひ、そのグループが違へば、違つた行動、違つた方法、違つた差等がある筈である。対象の完全な行動分析は、その中に異つた個人、異つたグループのもつ偏向——人間生活の多様に涉る状態——のすべてを包含することである。勿論、このような細目列挙的な分析は不可能であらうし、もしまたかりにそれが出来たとしても、問題的價値があるに過ぎぬといふに止まり、明日の存在を予言しがたい個人を、範疇のどこかに位置せしめるに過ぎないであらう。けれども行動の一般的分野は、實際面において何らかの方法、何らかの段階にすべての個人を位置せしめ、現実の原理的な分析を可能ならしめることによつて、中等

教育の基礎的目標を設定しようとしてきたのである。

(2) 中等教育の三つの基礎目標

この國における教育の對象はいらまでもなく個性 (Personality) であるが、教育の場においてその活動的な三つの面を捉え、その円満なる発達に導こうとしているのである。即ち、個人の生活を①市民の義務に参加し、共同社会生活の経済に何らかの關係をもつこと。②経済的效用に関する生産と分配とにあずかること。③相対的自由と個人の独立の生活。といった三つの部面に分ち考えるところから、次のような三つの基礎目標が措定されるのである。

A 次代の市民として、また社会の協力的な成員としての独立準備  
——社会的市民的目標

B 次代の勤勞者、生産者としての独立準備

——經濟的職業的目標  
C 次第に複雑化してゆく個人的な活動や、時間の活用、個性の発達などが社会的に重大意義があり、それらの諸活動に対する個人的な準備  
——個人的職業的目標

これらの三つの目標は相互に矛盾しないだけではなく、むしろ高度にあい結び、あい依りしてゆくべきものであることが認識されなくてはならない。之らは個人において統一され、綜合されて、最も広い意味での、中等教育の社会的目的を構成する。社会の單位としてある個人は、同時に市民であり、勤勞者であり、相対的に独立せる個性である。その生活における三つの面は、切り離せないし、中等教育に於て、生活の之らの面のどれか一つのための準備が軽んぜられるということもあつてはならないのである。

中等教育の三つの目標が各個独立でないばかりか、むしろ内的關

連があり、相互依存であることと、それらが各個人を關係づけている生活の三つの相異なる面を表わすこととは右に述べた通りである。歴史的にみるとその目標のどれか一つが無視されるとか、他より價值低く見るように主張されたために却つて、右の三つの目標の内的關連の必要性は正しく認識されてきたようである。それ故この國におけるどれか一つの目標の無視とか、注意の不足とかが、教育史的な反省によつて認識されおし、却つて現在ではその強調し過ぎの懸念さえあるとまでいわれている。(註10) かくて、個人的職業的目標は過去においてそれが果たすべきだつた以上の過分の扱いさえ受けてきた。教育学の立場からする客観的分析の結果、三つの目標を夫々に一度は分離したとしても、個人の生活活動の三つの形式の全一化のために十分な用意を怠つた中等教育は、満足なものとして考えられていないのである。かくて生徒の將來と、現実の社会を前提とするカリキュラムの中で、國語の学習は極めて實際的基礎的な諸能力を引き出すことを目標とするのは亦当然である。

### 三 アメリカ國語教育の實際

——初等・中等教育を中心として

アメリカの中等教育は現在に到るまで凡そ次の三段階の発達を上げてきた(註11)この國がまだ植民地であつた十六世紀から十七世紀にかけて、ヨオロッパの伝統そのままのラテン・グラマ・スクールが設けられ、排他的なラテン、ギリシヤの古典語の教育が主として行われた。ついで十八世紀の中葉にいたり、より大衆的な、完成教育を考慮するアカデミーが過渡的な形態をとつて現れた。そして十九世紀初め(1824) Boston English Classical School が Boston

English High School と改称して、高等教育 Higher Education の準備よりも完成教育を主として取り上げた。以後カレッジのカリキュラムは漸次高等学校のそれに近づいて、進学者に対しての特殊な、準備専門コースだけを目標におく学校の必要もなくなつてきた。(註12)

現在アメリカの学校制度は州によつて学校によつて異なるため、いちがいにいえないにしても、大体次の如くである。(註13)

初等教育 Elementary Education

幼児学校 Pre-Primary School

(幼稚園 Kindergarten)

小学校 Primary School

中等教育 Secondary Education

中学校 Junior High School

高等学校 Senior High School

専攻科 Junior College

高等教育 Higher Education (Terminal and Professional)

(1) 初等教育における國語

従来行われてきた入門期の教育方法に、アルファベット法 (Alphabet method)、單語法 (Word method)、発音法 (Phonic method)、文章法 (Sentence method)、物語法 (Story method) などがあった。(註14) 之らの方法はすでに古いとされているが、教師中心であり、個から全へ、觀念から現実への方角をもち、わが國においても中学校などで、会話から英語の入門を導いてゆく場合、之らの方法が多くとられているよりである。

ところがこの三四十年來、教育心理学が急速に発達し、教師中心

部分本位の学習指導法が批判され、まず学習の対象となるべきは、部分よりも全体、單語よりも文であり、基礎的な部分は全体の中の部分として、抽象化しない生きた部分として、全体の理解の後に部分へぼくしてゆこうとされたのである。この新しい初歩入門期の学習指導には、所謂、視・聽覺的要素が非常に多くとり入れられ、コトバの学習が総合的、生活的に行われ、全体を重んじながら部分を軽視しない方法がとられている。私はいま記述上の順序を整えるため、初等教育初期、はじめてコトバの集団的教育をうける幼児学校の学習指導法から逐次上級のそれについて略述してゆきたいと思ふ。

最近、従来の幼稚園の下へ更に二年の教育期間を設け、それらを通じて幼児学校といい、その期間に使う教科書をプリ・プライマー (Pre-Primer) とよんでいる。プリ・プライマーのガイドブック (註15) によれば、「読み方」の指導は、次の六段階に分けて考えられると云ふ。

1、読書準備の段階、これは幼稚園か、小学校第一学年の初期かに用意されるのが普通で、「読み方前の段階」(Pre-reading stage)である。

2、「読み方」学習の最初の段階、ここでは生徒が「読み方」における興味を多くし、書かれたもの、印刷されたコトバが彼らに告げる意味を明らかにしようとする欲求をもち、六〇或はそれ以上のコトバを通じての視野を開く。

3、生徒たちが継続的、且つ有意義に簡単な朗読をすること。及び教わらないで独立した「読み方」に興味をもつに至る段階。之らの目的 (goal) はつねに最初の学年の終り或は第二学年の

はじめに達成される。

4、急速な成長に伴つて、流暢な、正確な音読 (oral reading) のできる習慣と、黙読 (silent reading) によつて、明確に意味の理解のなされるような根本的な身解 (basic attitude) のできる段階。この段階は第二学年と第三学年において典型的に生ずる。

5、経験が急速に拡張し、そして読書の増大した実力が獲得される段階。かゝる成長は普通第四、五及六学年の頃、生ずるものである。

6、読書の興味と、その習慣、その趣味の洗練されてくる段階。

かゝる発達過程は中学校 (junior high school)、高等学校 (senior high school) 及び大学 (college) の時代に見られる。

読書を学ぶ子供たちの発達に対する注意ぶかい研究は、右の如く彼らが実力ある読書家となつてゆくのに幾つもの段階を通り越してゆくものであることを示している。発達の一段階は読書に關しての興味、態度、習慣における成長 (の持続的) 過程の一齣としてまず現状を考える。けれども、成長の種類は大なり小なりの程度で、どこかで重なりあつて発達してゆくところに見られるのである。だから、或る段階において第何学年という風に概念的には同一化していても、生徒の一人一人は異つた成長をしており、それに対して技術的に、或はまた生徒の要求によつて、彼らを個性化してゆくといふことは可能である。

前記の発達段階 (Grade level) の画一的な標準に合致しない子供たちの多くある事も亦事実である。彼らは示された段階より早く習得していつたり、また或る種の子供達は「読み方」の種々なる局

面での発達をとげるために、他の子供達よりもずつと長い間にわたる指導を必要とするかも知えられるのである。

ここで「読み方」の基礎的な教育の目標をどこにおいているか、またそれが何を達成しようとするかを知る必要がある。すべての読書活動のめざすより広い目標をまず、生徒の経験を拡張、さらに認識を深め、興味を広め、望ましい態度を涵養し、適切妥当な思想に導き、最後に、豊かで安定した個性の発達を可能ならしめる処におこりと考えられているのである。そして「読み方」の基礎的な教育が個性化されるために、次のような特殊な目標を設けねばならないとするのである。

- 1、読書するということに強い興味をよびさまし、効果的な読書法を学ぼうと強く願うように刺戟すること。
- 2、音読、黙読の両者によつて正しい認識の習慣をきちんと発達させるための用意をすること。
- 3、読んでゆく文の意味を明晰かつ正確に解釈する能力を発達させること。
- 4、読書を通じて獲得された観念に対して批判的な反省 (Reading) をする習慣や、又その観念を新しい事態に再構成したり、応用したりする習慣を発達させること。
- 5、効果的に朗読する能力を涵養すること。
- 6、さまざまな読書を通じて、永続的な興味と、そつらいつつ読書に對する強い動機とを涵養すること。
- 7、書物の選択においてその標準と趣味とを向上させること。

これらの目標が達せられたならば、生徒の物をみる力は向上し、より豊かで、より意義深い読書家となり、社会能力も伸ばし、一般教養

もより広くし、現代生活をより立派なものにする事柄に対しての評  
價力を働かして、生徒をすぐれた個性をもつ社会人となさしめり  
と考ふるのである。之らの事はまた真理の探求に測り知れない程の  
率仕もするし、有効な読書の習慣は個人的発達をいよいよ助長し、  
ひいては社会全体の進歩をささえ保証するに至るのだという点で重大  
性があるというのである。

かゝる見通しのもとに、入門期の子供たちに対する観察と経験の  
結果、少くとも「読み方」練習の三つの心得がその急速な発達を促  
進する上に必要な方法であるということを示している。即ち、

1、「読み方」の基本的指導が注意ぶかくプランされるというこ  
と。

2、色々異つた内容をもつ教材で「読み方」活動を系統的に指導  
してゆくという事。

3、クラスルーム、図書館、家庭などにおいて、指導されての読  
書と、自由な娯楽的な読書とを問わず、それらのための広い用  
意をしてやること。

これらの基礎的な三つの事柄のうち、どの一つの用意にしても、怠る  
ことがあれば生徒の興味、読書の態度、読書の習慣を無力なものに  
ぶちこわして了うことになる。

ところでプリ・ブライマーの子供たちを扱ひ良き教師のすべてが  
基本とすべき目標は、知的で、社会的で、道徳的で、情操的な少年  
少女の発達成長を促進助長し、彼らの身体的福祉を増進し、安定性  
のある個性の発達を図るといふ点におかれてはいるよりだし、こうし  
た努力は子供達の体験を拡張し、よき考え方 (Good thinking) を  
刺戟し、そして彼らの興味を日々ひろげてゆくという風に考えられ

ている。そのために次の諸点に留意しなければならないのである。

1、子供達は、教師が物語りをし、又は興味ぶかい一くさりの話  
をしている間、一心にきき耳をたてる。

2、子供達は、その学んでいる事柄に関連してもつと理解を深め  
るために遠足に連れつてでると、ほんとうに注意ぶかく観察す  
る。

3、子供達は、ラジオを聞く時、興味ある物語を好み、また価値  
ある報道を得ようとする。

4、子供達は、映画を見れば、スクリーンに現れてくるストオリ  
イを熱心に追ひ。

5、子供達は、絵画や、地図や、その他学習のための視覚的教材  
から多くを学ぶ。

6、子供達は、レクリエーションのためと、また彼らの課題に答  
えを見出すために、努力して広く読む。

こうした風な実践を通して、子供達は新しい洞察力、より広い興味、  
追求する態度、健康的な眺望などを要求しりうようになつてくる。

かくて注意ぶかくプランされたガイダンスの結果として子供達はそ  
の見、聞き、読み、そしてそれに対して批判するに至る。という風  
に、すべてを「理解の可能性」へと急速に発展してゆくのである。

このプリ・ブライマーの段階から、このようにしてあたえられた中  
広い基礎は、爾後の発達における各段階に価値と変化のある諸経験  
をもたらすのである。

プリ・ブライマーにおけるプランの中にも勿論、ウオキヤブラリ  
イのテストがしばしば織り込まれることはいふまでもないが、正し  
いコトバは言葉遊び (Language games) や、図形や、その他のア



クシヨンを通して楽しくごく自然に学ばれるのであつて、例えはワ  
 ークブックのある頁を開くと、そこにはお父さんらしい男と、お母  
 さんらしい女と、その子供らしい赤ちゃんと、ノロニールがあつて、  
 その夫々の絵の横には Mother, Baby, Father とつづつ三つの単語  
 が書かれてあり、子供達以前の頁にあつたお父さんとの絵には Father  
 お母さんの絵には Mother 赤ちゃんとのお母さんの絵には Baby とあつたのを  
 思い出して正しい単語を指摘する。という風にして単語をマスター  
 してゆくのである。それらが進むにつれて、新しい単語が増加して  
 くるが、できるだけ文本位に、全体から部分へ、具体から抽象へ、  
 単純から複雑へと導かれてゆくのである。だから work, play と共  
 に I, blue, yellow, red, see, come, go, up, down などの単語が  
 フォニースト・プリ・プライヤーに出づべきと、オカンズ・プリ・ン  
 ライヤーに出づべき my, make, big, little, in, to, away, help  
 などがニユー・ポイントとして語の中に出づべきと、Come to me. や  
 It is in the car. の to や in のつづき、それが me や it と、  
 どう関係しているか、などを考えさせたりもする。また上段、中段、  
 下段のある戸棚に、玩具の兎、皿、本が夫々各段に置かれていて、  
 それが何処にあるかをほつきりとコトバで指摘させるのである。そ  
 れは top, middle, bottom とつづいた空間的な観念を発達させるた  
 めに初期に設けられている課業の例である。

小学校で使つた教科書の一例としてウィリアム・ハリス (William  
 T. Harris) などの編纂した First Reader の第一頁を開くと、みん  
 と、まず口絵に、ノルシヤ猫があり、右側に a cat my cat the  
 cat とあり、冠詞や代名詞領格の限定機能を認識させ、その右側頁  
 には猫が鼠をくわえている図が示され、その下に Has a cat a

rat? The cat has the rat. とつづき問答を出して、The cat a rat  
 など冠詞の使用に注意を与えている。さらに次の頁では rat, r-a-t,  
 rat と単語の分解と綜合によつてスペリングの基礎的な注意がなせ  
 れている。ついで進んでゆくに、スペリングとサウンドとの関係を  
 hit mate, pin pane, can cane, cip cape などによつて注意を促  
 したりもする。こうしたいわば表記・発音などに關する細かい注意  
 はセカンド・リーダーに入つても根気よく継続され、物語に入る前  
 に新出単語の発音を示してある所もあれば、物語の後に出てきた單  
 語中、特に注意すべきものを木の如くに説明していたりもする。

W tried to blow out the candle, and said, "Go," but he  
 could not do it.

H said "I will blow it"; but the light would not go out.

"Let us try to blow it together," they said, and out  
 went the candle.

why when white where what who which

このように発音とスペリングとの間に不規則な溝の多い英語では  
 低学年から特にスペリング教育に力がそまがれるのである。最近の  
 進歩的学習指導法ではスペリング教育の目標を子供の表現意欲と関  
 連させて、子供が書きたがる事柄を間違ひなく正しく導いてゆくとい  
 う傾向もあつて、スペリングの規則や、用語例を課するのは旧式な  
 というより併用すべき方法と見られるに至つておるようでもある。

(註16) 文法も従来の文法書の方法——術語の定義・法則などを何  
 らかの体系で授け、その法則に關した用語例や練習題を課すという  
 ことは生きたコトバの理解のためよりは、文法を文法として形式的  
 に授けるためになされたといふことのために切実に反省されて

いる。比較的新しい教科書(註17)では文法教育の目的を

1、文を正確に話しかつ書けるよう

2、種々効果ある文をつくれるよう

3、句読法を正確にできるよう

4、書かれたページから内容を引出せるよう

子供達を助けてやる処にあるのだといつてゐる。ともあれ、小学校では専門的分化をせずに種々な教材が織りこまれ、所謂「読み方」だけではなく、高学年に進むにつれ、実際的な要素が多くなつてくる。例えば Good English-oral and written (註18)の第五学年の所を開つてみると、Words in a Series の章、

See, Saw, Seen

と動詞変化が列挙され、

See and sees are used to express present time. Saw is used to express past time. Seen is used with have, has, had, is, are, was, were, etc.

とある。文法的説明の章もあるが、その次の章は picture study で農場に六頭立の牡牛が働か引つてゐる写真がある。今話の What do you see in above the picture? What are the oxen doing? How do you think oxen compare with horses: (a) I strength? (b) In speed? などあり、作文には「その絵から暗示される物語を書け」といふのである。その次の章は人物伝、更にその次には Letter writing の章があり、友人に出す手紙の書き方、表書の仕方などが説明され、エトササイズがいろいろある。その次に文学の読み物がある。第六学年ではまた実用書翰 (Business letter) が入るといふた風にわが國の整理と統一のゆきと

いた教科書と、その編纂の意識において、すでに相異つてゐるのである。教科書がこのような体裁をなしているから、巻尾に相当な頁数を割いて、その概括 (Summary) がなされ、用語解 (Glossary) が字書の如くに施され、索引 (Index) が整備され、さら追加附録 (Appendix) を、能率的に使用されるのが教えられるのであつた。(以下次号)

註1 日本教育年鑑、山海堂一九四九年版。「教育使節団報告書」

一九四六年三月、その他一九四五年一〇月以後数次の G.H.O. C.I.E 指令などを参照

註2 "Education in the United States of America"; Bureau of Education, 1927

註3 "A Short History of the United States"; Bassett, John Spencer p. 186

註4 "English in the Junior College"; Cook, Alice Rice; Junior College Journal, 3: 313—3 1933

註5 "English Literature in Junior Colleges"; Gosch, Marcella; Junior College Journal, 10: 194—9 1939

註6 "The place of English in Junior College"; LaBrant, Lou; English Journal, 29: 356—65 1940

註7 "English Course for the Terminal Student"; Stone, Helen M.; Junior College Journal, 10: 85 1939

註8 「カリキラム」広岡亮藏 昭三三

註9 "Early Academy and College"; Alexander Inglis 1918

註10 "The interrelation of the Three Aim"; 西本

註11 "Secondary Education for American Democracy"; Wrinkle, William L. p. 125 1942

- 註12 「アメリカの英語教育」平井昌夫 昭二五
- 註13 “Principles of Secondary Education” 昭二五
- 註14 「アメリカ」の英語教育」平井昌夫 昭二五
- 註15 “Guide book for the Pre-Primer Program of the Basic Readers”: William S. Gray & Lillian Gray 1940
- 註16 “A Basic Writing Vocabulary”: Horn E. Univ of Iowa 1926
- 註17 “Junior English in action” V. III Tressler, J. C. 1941
- 註18 “Good English-oral and written”: William H. Eison & Clara E. Lynch 1940